

聖書:ルカの福音書11章37~54節

説教:内にあるものを施しに用いなさい

はじめに

私たちにすっかりなじみになったインターネットが始まった頃、研究者たちは、この技術によって世界は相互に理解し合い、偏見はなくなり、よりよい社会が創り上げられると単純に信じていました。それがどうなったのでしょうか。確かに便利になりました。しかし世界は理解し合うどころか、互いに憎み合い、戦争が起き、毎日多くの人たちが犠牲になっています。イエスは二千年前、「この時代は悪い時代だ」と言いましたが、いまもそのとおりです。なぜこうなってしまったのでしょうか。私たちは簡単に、あの国が悪い、あの政治家が悪いと言い、あの人たちがさえいなくなったら平和になるはずなのにと考えてしまいます。でもまず聖書はなんと言っているのか。このような時代だからこそ、もういちど神の語りかけに耳を傾けたいと願います。

## 1 外側と内側

### 1) 手を洗う、洗わない

ある日パリサイ人がイエスを食事に招待したのですが、イエスが食事の前に手を洗わないのを見てパリサイ人は驚きます。いま私たちが食事の前に手を洗うのは衛生的な理由でやりますが、イエスの時代はそうではありません。汚れたからだをきよめるため。そのように彼らは指導していた。このことは、聖書に書いてあるのかといえば、実はどこにも書いていない。パリサイ人たちが独自に定めた戒めで、タルムードあるいは口伝律法と呼び、全部で2700ページにもおよぶ膨大なものだそうです。

普通食事に招かれたときは、その家のしきたりに従うというのが礼儀です。ところがイエスは、従わない。そこには大きな理由がありました。

### 2) 内にあるものを施し用いなさい

39から41節。「なるほど、あなたがたパリサイ人は、杯や皿の外側はきよめるが、その内側は強欲と邪悪で満ちています。愚かな者たち。外側を造られた方は、内側も造られたものではありませんか。とにかく、内にあるものを施しに用いなさい。そうすれば、見よ、あなたがたにとって、すべてがきよいものとなります。」

例えば、ガラスのコップを洗っていると、妻から「汚れが落ちていないよ」とダメ出しをされる。外側が汚いのかとこすっても取れないので、内側をもう一度洗ってみたらきれいになるということがあります。それと同じことをイエスは言っているのか。

でもひとつだけ引っかかることばがあるのです。「内にあるものを施しに用いなさい。」内側をきれいにしなさい、とは言っていないことに注意してください。これはどういうことなのでしょう。

このあとイエスは、何度も「わざわいだ」と繰り返しながら、パリサイ人は律法の専門家を強く非難しています。そのところを見ながら考えていきます。

## 2 わざわいだ

### 1) 正義と神への愛

今日は六つある「わざわいだ」シリーズから、二つ取り上げます。一つ目は42節。「だが、わざわいだ、パリサイ人。おまえたちはミント、うん香、あらゆる野菜の十分の一を納めているが、正義と神への愛をおろそかにしている。十分の一もおろそかにしてはいけませんが、これこそしなければならぬことだ。」

十分の一をおさめることについては、申命記14章22節に書いてあるので、私たちが本来守るべき律法です。では、十分の一をおさめているからそれでよいのかと言えばそうではない。正義と神への愛。これを大切にしていなかったら、たとえ十分の一をおさめても何の意味もないと言うのです。

先ほどの外側と内側の話にこれを当てはめてみましょう。十分の一をおさめる。これは目に見える行いですから、外側ということになります。一方、正義と神への愛、これは目に見えないので内側のことになります。問題はここで、私たちはどうしても外側に見える方だけを考慮して、内側は見えないものは無視してしまう傾向があることです。パリサイ人はまさにその典型だったわけです。

イエスは見えないものではあるけれど、まず正義と神への愛を大切にしなさいと言われました。では、正義とは何か、神を愛するとはどういうことか。もう少し具体的な説明が必要です。

### 2) 荷物を負わせるけれど

そこで六つある「わざわいだ」シリーズの中から二つ目として46節を取り上げます。「おまえたちもわざわいだ。律法の専門家たち。人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本触れようとはしない。」

律法の専門家は、やはりパリサイ派に属する人たちが独自の口伝律法を教え、これさえ守れば神の前できよさを保つことができると教えました。この教えは今も正統派ユダヤ教徒に受け継がれていて、タルムードを七年かけて学ぶのだそうです。例を挙げれば、男性はもみあげを切ってはならないと言う教えがある。それは、聖書に「かみそりを当ててはならない」と書かれているから。もちろん私たちに言わせれば、それは杓子定規な解釈ということなのですが、いずれにしてもこのように細かな戒めを定めて指導する。これをイエスは、負いきれない荷物を負わせていると表現したわけです。

### 3) 荷物に触れようとしな

そしてもうひとつ、「自分はその荷物に指一本触れようとはしない」とも言っている。口先だけで「あなたがたは守れ」と言いながら、自分は守らないということでしょうか。でも、もしそんなことをしていたら誰も律法の専門家に従わなかったでしょう。指導者たちもタルムードを守っていた。けれどもイエスの目からご覧になると律法の専門家たちは指一本触れていないと見えている。それはどうということでしょうか。

## 3 イエス

### 1) 立場を変えて読む

イエスが何度も「わざわいだ」と繰り返し、口を極めてパリサイ人と律法の専門家たちを非難しています。こいうところになると、たとえイエスのことばでも読むのがつらくなるという方もいるようです。どうしてイエスはこれほど激しく責めるのか。いつものパターンですが、イエスが厳しい言い方をされればされるほど、そこに恵みがあると考えるべきです。

どのようにしたら、恵みが見えてくるか。いま、他人には思い荷物を負わせるけれど、自分では指一本触れようとしな律法の専門家のことを取り上げました。これを立場を変えて読んだらどうなるでしょうか。こういうことです。

### 2) 私たちの荷物を背負われる

イエスから、「律法の専門家は指一本触れようとしな」と言われた当の本人たちは、こう思うはずですか。「さんざん自分たちを非難したお前（イエス）はどうなんだ。そんなに言うのなら、お前（イエス）はきちんとやっているんだろうな。その証拠を見せろ。」聖書にはそこまで書いていませんが、そんなふうにするのではないですか。

冬のオリンピックでジャンプの高梨紗良選手が失格になったとき、「化粧している暇があったら練習しろ」というような非難が殺到し、高梨選手が謝罪したというニュースがありました。外野からヤジを飛ばす人たちは、自分が一生懸命練習するわけではないし、自分が大会に出るわけでもない。ただ、テレビの前に座って言いたい放題です。もしイエスもそのような方だったというのなら、私たちはこの方に従わなかったでしょう。なぜ私たちはこの方が神の子救い主ですと告白できるか。この方は、ご自分で語ったとおりのことをそのままなさる方だと知っているからです。

これほど口を極めて律法の専門家を非難し、「人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本揺れようとはしない」と言ったからには、イエスこそ、私たちが背負っている荷物を降ろしなさいと言われ、その荷物を引き受けて背負ってくださる。そう言っていることになります。

### 3) 内側にあるものを

七十七年前、第二次世界大戦が終わったとき、人類が再び大きな戦争をしないようにと、智恵ある人たちがいろいろな仕組みをつくって努力してきました。ところが、今どうなったか。もしかして第三次世界大戦が起きるのではないか、もしかして核爆弾が使われるのではないか。そう言われるようになってしまった。

どうしてこうなったのか。再びこのようなことが起こらないようにするためにはどうしたらよいか。多くの人たちが悩んでいる。でも聖書を読めば答えは出ていて、それも非常にシンプルです。イエスはこう教えている。「内側にあるものを施しに用いなさい。」

でもイエスは指摘していました。パリサイ人の内側は「強欲と邪悪で満ちています。」それはパリサイ人だけでしょうか。すべての人が神の前に罪を犯したのですから、すべての人の内側は強欲と邪悪で満ちているはずではないですか。それを施しに用いなさいと言われる。何をさておき、これがすべての出発点だと言われます。

でも、少しおかしくないですか。施しとは貧しい人たちに自分が持っているもの、例えばお金であるとか、食べ物であるとか、衣服であるとか、そのようなものを与えることです。強欲や邪悪を施しに用いることなどできないし、仮にできたとしても、相手に対して大変失礼なことになる。

#### 4) 施す

イエスのことばはいつも不思議に満ちています。こう考えたらどうでしょうか。例えばお金を施そうとするなら、まず財布をポケットから出さなければなりません。施すためには、内になるものを外側に出すことになる。それで、イエスのことばのとおり内側にあるものを施そうとすると、強欲と邪悪を外側に出さなければならなくなる。でもこれは、普段ずっと隠していたものです。それを外に出すのです。とても恥ずかしいことで、こんなものは人に施せるものではない。そう気がついて、悲しむでしょう。

そうしたら何が起るのか。外側ばかりを見ていたときは、自分は持っている、豊かである、優れている、神の前にきよく正しく生きていると思込んでいたけれど、内側を見たら、とてもきよいところなどない。何も持たない貧しい者であったと気づくとき、実はあなたは内側からきよめられていく。どうして、そんなことが起るのか。内側を見て汚いと感じるのは、比べるものがあるからです。きよいものがわかるから、自分は汚いと感じる。そう感じたとき、あなたはきよめられていき、神のまえに義とされ、神を愛することができなくても、愛するようにと励ましてくださる。だれがそうしてくださるのでしょうか。私たちの内側にある強欲と邪悪、それは罪と呼ばれるものですが、その罪に触れてくださり、引き受けてくださる方がいるからです。

正義と神への愛と言われると、とてつもなく高いハードルに聞こえますが、実は、私たちの内側にあるものを神に差し出していただけだったので

す。この後、イエスは律法学者たちとパリサイ人たちから激しく攻撃され、やがて十字架に追われていきます。この方の十字架にしか、この世界の争いの解決がないことをあらためて確認し、この方に私たちの内側にあるものを差し出したいと願います。